

学校推薦型選抜（文学部）

小論文課題

令和七年十二月十三日

一〇時〇〇分～一二時〇〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この課題冊子を開いてはいけません。
- 二、この冊子の本文は全部で七頁です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答用紙は、課題（一）用が三枚、課題（二）用が三枚の計六枚あります。解答用紙のすべての指定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
- 四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 五、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 六、草稿用紙が足りなくなった場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 七、解答用紙、課題冊子は持ち帰ってはいけません（草稿用紙は持ち帰ってください）。

課題（一） 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

著作権の都合上削除

著作権の都合上削除

著作権の都合上削除

(入江昭「国家の枠組みを離れた歴史」)

設問 この文章は二〇一五年に発表されたものです。傍線部に見られる著者の意見について、その後の世界情勢の変化を踏まえながら、あなた自身の考えを八〇〇字程度で述べなさい。

課題(二) 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

クラウドス(注一)がその生涯を通じて批判の矛先を向けた主要な対象は、当時の新聞ジャーナリズムであった。とりわけ、新聞の紙面に氾濫する紋切り型の常套句フレージンないし決まり文句レディンズに対して、クラウドスは『炬火』を舞台に激しい攻撃を仕掛けた。ただし、その照準は新聞記事だけではなく、それを読む者にも等しく向けられている。

彼は晩年、自身の論集『言葉(Die Sprache)』を準備していた。これは、彼が長年『炬火』に寄せた数多くの論考のなかから言葉をめぐるものを選び抜いてまとめたものであり、様々な〈言葉の実習〉の実践のほかに、新聞ジャーナリズムに対する様々な批判も収録している。この論集の題辞のひとつに、彼はショーペンハウアー(注二)が記した次のような一

節を掲げている。

……およそ活字を読む人間の九割以上は新聞のほかにも読まない連中であり、その結果、彼らの正書法、文法、文体が新聞に従って形成されるのはほとんど避けられない。

シヨーペンハウアーやクラウスが新聞を主たる攻撃対象としたのは、当時は新聞が最大の情報媒体メディアだったからということに尽きる。仮に、テレビやラジオなどが当時すでに発達していたとするなら、彼らはそれらのマス・メディアにも強い批判を向けただろう。いずれにせよ、シヨーペンハウアーと同様にクラウスが深刻な問題を見て取っていたのは、人々が「自分の文章」や「自分の意見」と思って語っている言葉が、多くの場合、実は他人が繰り返している常套句のさらなる反復に過ぎない、という点である。自分が用いようとしている言葉に思いを凝らし、吟味して選び取るというのは、人に課せられている最も重要な責任だが、現状は最も軽視されてしまっている、クラウスは警鐘を鳴らし続けた。その彼の問題認識が凝縮した叙述を引用しておこう。一九二一年六月に『炬火』に掲載された論考の一節である。

他人が書いたものに目を開くとまではいかないにしても、せめて自分の言葉に耳を澄ますようにさせ、それと知らずに日々口にしていく諸々の意味を追体験してもらい、ことができるなら、人間にとって益するところが大きいだろう。慣用表現の活性化、日常の交わりで使う決まり文句の鮮度を高めること、かつては意味をもっていたものには物言わなくなった言葉の身元確認、それらを人間に教えることは有益だろう。……根源に近づけば近づくほど、戦争から遠ざかるのだ。もしも人類が常套句をもたなければ、人類に武器は無用になるだろうに。誰しも自分の話す言葉に耳を傾け、自分の言葉について思いを凝らし始めなければならない。そうすれば、すべての失われたものが蘇るだろう。

こうした彼の訴えは、いかにも唐突であり、また滑稽なほど大袈裟なものに映る。しかし、木下康光が指摘するように、当時彼が置かれていた状況、彼が見つつあった事態を鑑みるなら、むしろこれが不気味なほど正確な予言であったことが分かる。すなわち、彼がこれを書いた翌月の一九二一年七月にナチス内部のアドルフ・ヒトラー独裁体制が確立し、そのおよそ十年後には国会議員選挙で全体の四割近くの支持を受けて、ドイツに合法的にナチス国家が誕生したのである。ナチスこそ、「宣伝省」という歴史上でも類例を見ない機関を有し、マス・メディアを駆使し、常套句を駆使したプロパガンダや演説によって人々を誘導して、世界を戦争と悲惨に巻き込んだのであり、クラウスが予見していた事態の最

悪なかたちがそれであったと言えるだろう。

ヒトラー本人が『わが闘争』のなかで説明しているように、ナチスのプロパガンダの言葉は、彼の考える闘争に勝利するという「目的のための手段」以外の何ものでもない。できるだけ多くの大衆の（知性ではなく）感情に訴えかける強い言葉によって、彼らの心に入り込み、「民族の自由と独立」や「国民の名誉」を守る闘争に動員することが肝心だという。それは具体的には、国籍、人種、民族、性別、政治信条等に関して、レッテル貼りを繰り返して人々のステレオタイプを強化しつつ、敵味方の対立の構図を単純化することであり、そうして「極悪な敵に対する怒りと憎悪の念を高める」ことである。たとえば、「ユダヤ人」という言葉に括られる人々の現実の有り様や個性、多様性といったものに連想を広げることなく、十把一絡げに「劣等人種」や「害虫」といった言葉に置き換え、殲滅すべき対象として扱うことは、そうした構図の単純化や思考停止の典型である。ヒトラーによれば、この目的を達するためには、別の見方や新しい観点といったものは大衆に供給せずに、限られた事柄に対する紋切り型の主張を繰り返し拡散すること、平板な言葉を執拗に反復して大衆に刷り込むことが重要であるという。その要点は、「プロバガンダに学問の講義のような多面性 (Vielseitigkeit) を与えようとするのは間違っている」という一節に要約されると言えるだろう。(中略)

多面性を徹底的に排除した言葉を繰り返す、こうしたヒトラーの戦略が実に効果的であったことは、先述の通り、歴史が証明している。それはまさに常套句の氾濫、決まり文句の洪水であり、それが人々を流して思考を停止させ、単一の方法に誘導していく過程であった。

第二次世界大戦後、イギリスの作家ジョージ・オーウェル（一九〇三―五〇）は、(中略) 政治と言語をめぐる論考を公にしているが、ジャック・ブーヴレスをはじめとする論者が指摘しているように、そこにはクラウスの議論との深い共通性を確認することができる。たとえば以下のような論述である。

……最低の現代文がそうであるのは、意味に心を砕いて言葉を選び取ったり、意味をより明確にするためにイメージを生み出したりしないところに起因する。すでにほかの誰かによって整えられた長い言葉の断片をつなぎ合わせ、全くのごまかしによって結果をもっともらしく見せかけるところに、悪文の悪文たるゆえんがある。このやり方の魅力は、手間が掛からないということである。……一度その習慣を身につければ、その方が手っ取り早いのだ。出来合いの常套句フレキシブルを使えば、言葉を探する必要がなくなるだけではない。そうした常套句は一般に多少なりとも響きよく配列されているから、文章のリズムに頭を悩ます必要もなくなるのだ。

ここでオーウェルは、クラウスと同様に、言葉を選び取る責任というものに着目してい

る。出来合いの常套句をつなぎ合わせて語れば、言葉を探す必要もなく、手っ取り早い。しかし、そうやって組み上がるものこそ最低の文章だと痛罵するのである。そして、そうした悪文の典型としてオーウェルが提示するのが、しばしば政治家などが語り、マス・メディアで拡散される紋切り型の言葉である。

……政治の言葉は、主に婉曲法と論点回避と、朦朧たる曖昧性とから成り立たざるをえない。無防備な村落が空爆を受け、住民が山野に追い出され、家畜が機関銃でなぎ倒され、家が焼夷弾で焼かれる。これが鎮圧と呼ばれる。何百万人もの農民が農場を奪われ、携行できる物だけ抱えて重い足どりで道を歩かされる。これが住民の移送とか国境線の調整と呼ばれる。人々が裁判も受けぬまま何年も投獄されたり、頭を後ろから銃撃されたり、北極の木材切り出し場に送られて壊血病で死ぬ。これが不穏分子の排除と呼ばれる。物事を名指しつつ、それに対応する心的なイメージを喚起しないことを欲した場合に、こうした決まり文句が必要となるのだ。

オーウェルによれば、政治の言葉の特徴とは、論点をぼやかす曖昧で婉曲な言い回し、物事を名指しつつ、それに対応するイメージを喚起させないことを狙った決まり文句である。そのような言葉は、苛烈な現実をオブラートに包んで曇らせ、人々の感受性や想像力を麻痺させる。いや、それだけではない。「政治の言葉は、保守党員からアナキストまで様々な違いはあるものの、どれも、嘘を本当と思わせ、殺人を立派なものに見せかけ、空虚なものを実質の備わったものに見せようという意図をもっている」。(中略)

最も悪質な例を挙げよう。それは、ナチスやそれを支持する人々が、ユダヤ人を「害虫」と繰り返しレッテル貼りし、あげくには実際に虫けらのように殺戮したことである。「害虫」という言葉は当然ユダヤ人を意味するものではないにもかかわらず、彼らをそう呼び、ついにはそれらと文字通り同じ扱いをした。つまり、これも、常套句によって現実を曇らせるだけでなく、現実そのものを歪めて常套句に合わせてしまうことにほかならない。その意味では、「ヴェールとしての言葉」^(注三)という有り様が現実——しかも究極の仕方——にあらわれているのが、ナチスのプロパガンダの言葉と言えるだろう。

(古田徹也『言葉の魂の哲学』)

(注一) カール・クラウス(一八七四—一九三六)。オーストリアのユダヤ人作家・ジャーナリスト。

(注二) アルトゥル・ショーペンハウアー(一七八八—一八六〇)。ドイツの哲学者。引用文は『余録と補遺』より。

(注三) 現実との媒介である言葉の様相をあらわした、筆者にとってのキーワード。

設問

傍線部の「常套句に合わせてしまうこと」の問題点をあきらかにした上で、その解
決方法についてあなた自身の考えを八〇〇字程度で論述せよ。